

# ICT機器を利活用した交流授業の研究

副題

～本校と異なる地域の学校等との交流によるコミュニケーションスキルの向上をめざして～

学校名

唐津市立小川小学校・唐津市立小川中学校

所在地

〒847-0306  
佐賀県唐津市呼子町小川島841番地

ホームページ  
アドレス

<http://cms.saga-ed.jp/hp/ogawa-j>

## 1. 研究の背景

本校は佐賀県北部にある唐津市の呼子港より北におよそ6.8kmの位置にある小川島の学校である。小中一貫校で、児童19名、生徒7名の小規模校である。児童生徒は全体的に素直で何事にも一生懸命取り組むことができる。しかし、ほぼ全員が同じ保育園から一緒に進学、進級してきており、人間関係が固定化してしまう現状がある。また、島の外部との接触が少なく、校内では意見を言うことができても、島外の児童生徒と交流をすると自分の意見を発表したり発言をしたりすることができなくなることが多い。そのため、本校では平成22年度から小学校、中学校の全教科・全領域で表現力の育成を目指して研究を進めてきた。

昨年度までの取り組みとして本校では、電子黒板等のICT機器を使って遠隔地と交流授業を行った。その結果、異なる文化、異なる環境に暮らす人々に情報を発信したいという動機づけになるとともに、相手を意識した言葉遣いや資料選びができるようになった。しかし、無料のテレビ電話ソフトを用いると、画像が不明瞭であったり音声聞き取りづらかったりするなどの問題があった。そこで本年度はシスコシステムズの通信機器を用いることでより鮮明な画像、音声での交流を実現し、児童生徒が交流に集中できる環境を整えることを目指した。

## 2. 研究の目的

9年間の学びの継続を意識し、テレビ電話及びテレビ会議システムを介して他校との交流を行い、言語活動・交流活動を充実させることで、児童生徒のコミュニケーションスキルを向上させるとともに、確実な学習内容の習得に裏打ちされた表現力を育成する。

## 3. 研究の方法

国内外の様々な環境にある学校とテレビ電話やテレビ会議システムを通じて交流を行い、自己紹介や町紹介、意見交換等をする。

## 【交流日程】

期日	相手校	所在地	内容
7月15日	荒川区立ひぐらし小学校 唐津市立加唐中学校	東京 佐賀	自己紹介 合同朝の会
7月16日	荒川区立ひぐらし小学校	東京	合同スピーチタイム
8月5日	唐津市立加唐中学校	佐賀	生徒会交流
8月22～23日	荒川区立ひぐらし小学校	東京	交流体験学習
10月7日	唐津市立加唐中学校	佐賀	合同朝の会
10月22日	シドニー・オリンピック・パーク・オーソリティー他	オーストラリア 韓国	バーチャル遠足
10月31日	小中一貫北山校	佐賀	自己紹介
11月7日	Birchip P-12 school	オーストラリア	自己紹介
11月14日	小中一貫北山校 Birchip P-12 school	佐賀 オーストラリア	町探検 学校紹介
11月25日	唐津市立加唐中学校	佐賀	合同朝の会
12月12日	荒川区立ひぐらし小学校 Birchip P-12 school	東京 オーストラリア	自由交流 町紹介
2月26日	唐津市立加唐中学校	佐賀	合同朝の会
3月12日	唐津市立加唐中学校	佐賀	合同朝の会

## 4. 研究の内容・経過

### (1) 同じような環境の学校との交流

本校と同程度の規模で、離島にある学校との交流を行うことで比較的積極的に交流ができると考え、加唐中との交流を行った。中学校では表現力の育成の一環として朝の短学活の時間に「気になるニュースの紹介」と称して毎日1人が自分の気になるニュースを紹介し、そのことについて1人ずつ意見を言う取り組みを行っている。加唐中学校との交流を行った際には気になるニュースの紹介を合同で実施し、意見を交換した。(写真2)。



写真2 加唐中学校との交流

### (2) 同規模で環境の異なる学校との交流

小学校1・2年生は10月と11月の二回にわたって佐賀県佐賀市の小中一貫北山校との交流を行った(写真3)。島の学校である本校と山の中にある北山校とで、生活科の単元のなかにある「町探検」の一環としてそれぞれの町について調べた結果を紹介した。



写真3 小中一貫北山校との交流

### (3) 都会の学校との交流

小学生は、本年度4回にわたって東京都にあるひぐらし小学校との交流を行った。2回目の交流では本校で表現力の育成を期して取り組んでいる「スピーチタイム」に参加してもらい、意見の交換を行った(写真4)。その際には本校と環境の大きく異なる学校であることから、自分の言いたいことを相手にわかりやすく伝えるために、適切な言葉遣いや声量、話す速度などにも注意しながら図や写真を効果的に用いることを意識させた。夏季休業中には6年生の児童2名が東京に行き、ひぐらし小学校を実際に訪れた。



写真4 ひぐらし小学校との交流

### (4) 外国の学校との交流

10月にオーストラリアのシドニー・オリンピック・パーク・オーソリティーで渡り鳥の研究をしているマリアン・シューマック博士によるバーチャル遠足に参加した。(写真5)。

本校以外にはオーストラリアのビクトリア州から2校、韓国から2校が参加した。内容は「渡り鳥について」というテーマで、オリンピック公園に生息する野鳥の講話があり、その途中で各学校(各国)への質問があった。本校への質問は「日本に飛来する渡り鳥」についてであり、予め調べていた渡り鳥について答えた。



写真5 バーチャル遠足

11月、12月には外国語の授業の一環として、オーストラリアの小中高一貫校 Birchip P-12 school と交流を行った。互いの町の環境についてや、盛んなスポーツについてなどを紹介した。

## 5. 研究の成果

これらの交流を行ったことだけで本校の児童生徒のコミュニケーションスキルが飛躍的に上昇したとは考えていない。しかし、本校単独では聞けない意見を聞くことができたり、相手がいることで相手とコミュニケーションをとる必要性を感じるなど、交流をすることのメリットを様々な場で感じる事ができた。以下はそれぞれの学校との交流での主な成果である。

(1) 同じような環境の学校との交流

「気になるニュースの紹介」では他校と交流することで意見の深まりを見ることができた。また本校には中学校3年生が在籍しておらず、2年生にとって次年度の高校進学に意識が向きにくい実態があったが、加唐中学校の3年生との交流によって、高校入試の日程や倍率等について積極的に調べようとする態度を見せるなど、次年度の高校入試への意識づけになったと考えられる。

(2) 同規模で環境の異なる学校との交流

小中一貫北山校との交流では寸劇などを交えて互いの地域のことについて説明することができた。他校との交流ということもあり、緊張もあったが、自ら質問を投げかけるなど、積極的に交流しようとする様子が見られた。相手の町の特徴を知るとともに、自分たちの住んでいる地域の良さも再認識することができた。

(3) 都会の学校との交流

小学生は、写真を使ってスピーチをすることで言葉だけの場合より自分の表現したいことが伝えやすいことを知るとともに、プレゼンテーションへの意欲が高まった。また、スピーチ後の感想交流も伝える内容が多くなることで活発になった。

(4) 外国の学校との交流

バーチャル遠足では日韓豪の3カ国で交流するという貴重な経験をするすることができた。日本に飛来する渡り鳥の種について調べる作業を経てインターネットを活用する方法を身に付けることができた。

Birchip P-12 school との交流では、教科書だけでは学ぶことができない様々な英語表現を学ぶとともに、オーストラリアの生きた英語を聞くことができ、英語に対する関心を高めるきっかけとすることができた。また、自分たちが住んでいる町について考え、まとめる活動を通してプレゼンテーションソフトの活用方法を身につけることができた。

6. 今後の課題・展望

本年度、加唐中学校との交流を無料のテレビ電話ソフトで行い、小中一貫北山校、ひぐらし小学校およびBirchip P-12 school との交流はシスコシステムズのテレビ会議システムを用いて行った。この二つの通信手段は共に相手の音声および映像を互いに視聴することができ、国、地域を問わず交流を行うことができる。大きく異なるのはその画質と音質である。無料のテレビ電話ソフトでは、画像が荒く、カメラより数m離れると表情を読み取ることが難しくなる。音声についても聴きとりづらい部分が多々あり、スムーズなやり取りをするには適していないと感じた。一方、シスコシステムズのテレビ会議システムは有料ではあるが、画質は鮮明で、音質もクリアであるため、まるで同じ部屋の中にいるかのような感覚で交流をすることができた。有料であることや、相手も同じシステムを導入していなければ交流ができないというデメリットを克服することができるのであれば、本校のような離島や、僻地の学校で他校との交流が必要である学校には非常に便利なツールであると考えられる。来年度には唐津市内の学校のうち数校が同じシステムを導入することとなっている

## 7. おわりに

様々な環境の学校の児童生徒との交流授業を通して、小規模校では実現することが難しい「多様な考え」に触れさせることができた。本校の子供たちはやがて高校進学、就職等で島の外に出ていくときがくる。そのとき、今回の経験を通して多くの人間と協力して学ぶことの大切さや、学びの広がりそのものの楽しさを経験したことが必ず生きてくるものであると考えている。自ら相手に話しかけたり、相手の話をよく聞いて理解しようとしたりといった人間関係構築のために大変大事なことを学ぶことができ、今回のこの取り組みは本校にとって非常に有用であった。今回、このような機会を与えていただいたパナソニック教育財団を始め、本校と交流をしていただいた関係各校及び関係者各位に感謝を述べたい。